慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田の国史学と幸田成友
Sub Title	Professor Shigetomo KODA and his contribution to the formation of the department of Japanese history
Author	林, 基(Hayashi, Motoi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.27(201)- 33(207)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告 第一回座談会 三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田の国史学と幸田成友

林　基

三田の国史学の系譜を田中萃一郎先生のところからぜひ明らかにしておいていただく必要があると思っていましたが、それをちゃんとやっていてくださるので、大変うれしく思います。私が幸田先生に習ったのは昭和十二年から十五年ですから、すでに五十年前になるのですけれども、そのころ幸田先生は六十代のなかばでした。そのころは気がつかなかったのですが、幸田先生は、今考えてみると慶應義塾の史学科とやはり運命を共にしていると思います。それから史学科ができるもとになった、近代ヨーロッパの歴史学の日本への最初の導入のときから幸田先生がかかわっているのです。実に不思議な歴史のつながりがあったのだなということをつくづく思うのです。

田中さんは慶應ではリースを一番よく理解した弟子だといわれていますが、幸田成友は東大でのリースの最大の弟子だったと私は思います。リースが来たのは明治二十年ですけれども、明治三十五年までいたんですね。幸田先生が東大に入るのは明治二十六年九月ですけれども、それ以前のところで、リースについてちゃんと摂取したという人はいないように思います。田中萃一郎がリースに学んだのは、明治二四、二五年ですから、幸田先生より一歩先輩です。

リースが来て、日本で初めて東大に史学科ができるのです。国史科は、二二年に開設されます。東洋史学科も西洋史学科もまだありません。こうして、幸田先生が東大に入学したとき史学科と、それから国史学科というのがありました。国史学科というのは、天皇制史学の流れの学科でした。それで幸田先生は、日本史に関心があっ

たのだけれども、国史学科ではなく史学科にすゝむわけです。そのときすでに近代ヨーロッパの新しい歴史学の方向をめざす重要な選択が行われていたのです。それがどこからきたのか明らかにするのは、これからの課題ですが、長兄の幸田露伴の影響もあったかも知れません。とにかくこの選択のおかげでリースに巡り合う。

その二十六年が東大の史学科に学生が一番たくさん集まった。それまで一人か二人しか来なかったのが、いっぺんに十人になり、国史学科にも一〇人の学生ができ、そこに錚々たる後の日本歴史学の開祖、内田銀蔵、原勝郎、黒板勝美、喜田貞吉などは全部そのときの同級生です。この三年間と、それから大学院でまだしばらくリースの指導を受けていたわけです。リースは幸田先生だけではなくて、内田銀蔵、さらに慶應の田中萃一郎とかいろいろな人々を通じて、その後の日本の歴史学に大きな影響を与えることになるわけなのです。そこで幸田先生は東大を首席で卒業するのです。ところが、幸田先生はポストが得られない。東大のほうは先輩の三上参次氏が国史学科の大将として、その後の東大の国史学科をつくっていくわけです。内田銀蔵は早稲田を出て国史学科に入り、日本経済史をテーマにして大学院の論文を書いて、そして新設の京都大学の教授になっていくわけです。ところが、そういうふうにして同期に出た人々は大体みんないろんなポストについていくんだけれども、幸田先生には、与えられなかったのです。

しかし、とにかくリースの講義は英語でやるわけだから、全然わからないというわけです。それで、事前に先生のところに行って、講義の要綱を書いてもらって、それを印刷して学生に配る。それを幸田先生がやるのです。それで、いかにリースがそういう原稿をつくるのに苦労しているか、三回も四回も原稿を書き直している、期日にぎりぎりにならなければそれがもらえない。それを何度も何度も通う。それで、教師というのはどんなふうに講義の準備をしなくちゃならないのかというようなことをたたき込まれたのです。それで、僕らが慶應で習った時代の幸田先生もそれを守るわけですね。それだけ大先生になっていたって、前の日にうっかり行ったら、どやしつけられるわけです。どんないいお客さんが来ても、きょうは勉強がありますからお帰りください。そういうふうにして、何回もやっている講義を、何十回となく全部調べ直す。そうしなければ講義に出てこない。

そういう調子だから、うっかりしてノートを忘れて授

業へ来て、鞄を開けたら何にもないんだね。それで、普通なら立ち往生するんだけども、えい、しようがないなんて言って――全部材料を持ってきて、講義のときにその参考書などを全部見せてくれるのが例なのです。ちゃんと講義案を持ってきて、それを一応読んで、そして補足的なことをいろいろ話してくれる。その補足的なところにいろんな有益なことがあるのだけれども、いまは余裕がありません。とにかく学問の内容だけでなく、研究や教育の態度までリースから一番よく学んだのだと思うのです。そういう幸田成友を呼んできて、慶應の史学科ができる。そして、そのできた慶應の史学科は、国史学科ではなくて史学科だという、そこが実に歴史的意味があるように思うんです。

東大を卒業したあと、幸田先生にはポストがなかったけれども、かえってそれが幸いして、明治三十四年になって大阪市史の編纂が始まったときに、大学を出て五年ぐらいの先生が大阪市史の主任として全権を任されて呼ばれる。一つの仕事をみごとに果して明治四十二年、一年だけ京都帝大文学部講師をつとめたあと、東京に帰ってくるんです。それを待っていたかのように、慶應の史学科が始まる。明治四十三年に田中萃一郎によって――四十三年の創設は、誰かバックアップした人が慶應のどこかにいたかもしれない。けれども、実際には恐らく全部田中さんの構想でつくられたのだと思うのです。

田中さんは慶應に史学科をつくるという構想を重要な柱として考えられていたと思います。第一年度の日本史の教員は、幸田成友と山路愛山の二人です、翌年に古文書学の伊木寿一先生、さらに翌年には日本経済史の福田徳三、時代史名著研究、演習の松本彦次郎が加わります。そのころ、徳富蘇峰、竹越与三郎（三叉）、それから山路愛山、これが民間史学の三羽烏とされていました。竹越は慶應出身で（史学科ではもちろんないけれども、慶應出身です）、恐らく田中さんなどとも関係があったのではないだろうか。それはまた今後いろいろ調べて明らかにしてほしいと思うのです。

竹越三叉の有名な『日本経済史』、これは大正の四年から四年間、竹越与三郎が政治活動を全部やめて、専心してやるわけですけれども、実際に江戸時代のところをやった人は木村荘という人なのです。これは後に東京市史稿の仕事を全部やる人で、慶應出身です。

山路愛山はわざわざ、二年間だけれども、創立のときに呼んできている。そういうのも田中萃一郎の構想の特

質を語っているのではないでしょうか。官府の歴史学ではなくて、在野の史学科をつくろうという精神がやはり基本だったのでしょう。ともかく、ちゃんとした歴史家というのは、そのころまでは東大でしか養成されていないわけです。そうすると、東大を出た人々の中でも、そういう反骨のある人々を呼んでくるということだったのではないでしょうか、東洋史の橋本増吉、日本史の川上多助、松本彦次郎などのメンバーを見ると、私はそんな気がするのです。

それからもう一人、速水君の関係なのだが、福田徳三も呼んできているのです。

福田さんは理財科講師なのだけれども、文学部のリストを見たら、明治四十五年から日本経済史を教えている。日本経済史という科目自体が、この段階では大学の科目で非常に新鮮なものだったのだと思う。それをしかも福田徳三にやらせるというのも、田中萃一郎の識見ではないだろうか。明治四十五年から大正六年までやっています。滝本誠一が文学部の日本経済史を大正九年から担当していますが、これは福田徳三が東京商科大学にもどった後任です。三田の史学科の日本経済史の最初は福田徳三です。

大正十一年に幸田さんが商大（現一橋大学）に引っ張られる、これもひょっとすると福田徳三の誘いかもしれない。それはまたいろいろ商大関係の人と連絡して調べてほしいと思うのです。あれは、ともかく幸田先生が慶應がいやになってよそに出ていったというのではないんだと思う。ちゃんと明治四三年に慶應に入ってからずっとやっているわけで、商大からぜひと言われて行ったのではないでしょうか。

福田徳三は明治三八年から大正七年まで慶應のほうが主で、大正八年に商大のほうへ行って、商大の中心になっていきます。そして商大に移ってからは福田氏の専門は経済史のほうから離れていきます。日本経済史などをしばらくやっていくのだけれども、経済原理のほうにずうっといってしまうわけで、日本経済史のほうを幸田さんを引っ張ってきてやらせたということではないのでしょうか。

とにかく、何で幸田さんが慶應に明治四十三年に入ってきたのか、それからその後、最後まで慶應の教師として離れなかったというところは非常に大きな意味があるので、その点をいろいろ調べて明らかにしてほしいと思うのです。きょう一つお話ししておきたいと思ったのは、

そういう三田史学と幸田成友との関係の問題です。

もう一つは、日本の史学史の中での幸田成友の位置ということをぜひ全面的に明らかにしていく必要があると思うのです。幸田成友の歴史家としての仕事は、大阪市史などを除けば、商大（一橋）のほうでの研究教育は副業みたいなもので、あとは全部慶應なのだから、彼の歴史家としての日本の史学史上の位置というのは、同時にまた三田の史学の日本の歴史学における位置という問題の重要な一環になるわけだから、三田の仕事としてやっていく必要があると思います。しかも、その点は、残念なことにまだほとんどやられていないのです。いまいろいろな学問についてそれぞれの歴史がやられているでしょう。そして、その中での個々の歴史家の位置づけというようなものもだんだんやられるようになってきているわけですけれども、日本経済史については、そういう仕事はまだ十分進められていないように思います。

本庄栄治郎博士の論文「経済史研究の発達を論じて日本経済史研究所の設立に及ぶ」（『経済史研究』、四一号、一九三三年）は、経済史研究の発達を述べた、数少いこの分野の成果のひとつですが、「日本経済史研究所」が中心になっているせいもあるのでしょうか、残念ながら幸田成友にはふれていません。一九三二年末の雑誌『歴史教育』に載せられた「明治以後における歴史学の発達」という特集号に社会経済史の研究史を土屋喬雄さんが書いています。これには幸田成友がちょっと出てくるのです。明治四〇年―大正一〇年の日本経済史学の重要な業績として『大阪市史』が挙げられ、「市史として最初の代表的なものであった。大阪が日本経済史上重要なる大都市であることは言うまでもないからその市史が幸田博士の如き優れた史家によって編纂せられ、不朽の大史料とし我々に与えられたことは大なる幸福であった。」と評価されています。しかし『大阪市史』の日本経済史研究への寄与の分析は、まだ与えられていません。

それから慶應時代に慶應や一橋の雑誌に書いた業績は、先生の慶應大学での博士論文のもとになった『日本経済史研究』という本に集められています。札差だとか幕府の御用金だとか、経済史研究と言っても、農村関係のことは先生はほとんどやらなかったから入っていないけれども、これもつぎの時期の重大な業績としての評価がされています。しかし、そこでもそういう仕事がその部面の研究の歴史の中で、どのような意義を持つか、位置を占めるか、というところまでは、ただ重要な業績だと言

われているだけにとどまっているわけです。そういうわけで、幸田成友のきちんとした史学史的な解明というのは行われていないのです。それはぜひ若い諸君がやってくださるとありがたいと思うのです。

幸田先生の具体的な仕事としては、いまの大阪市史の問題、それから江戸のこともあわせて研究して、総合的な近世経済史にすゝもうとした一連の研究、ただそれは残念なことに完成しませんでした。あと一つ、日欧通交史関係の仕事があります。直接私がお手伝いしたのは、この日欧通交史関係の仕事で、そこのところの先生の勉強の仕方などを一番私はよく知っているのです。その日欧通交史関係のほうの研究史はまだできていないように思うから、先生の『日欧通交史』などを含む、そのほかのいろいろな仕事がどういう意味を持ち、今後の研究にどのように役立つかという点を、ぜひ高瀬弘一郎君などにやってもらいたいと思うのです。高瀬君は幸田先生の直接のお弟子さんではなくて、吉田小五郎氏を介して孫弟子になるわけですが、孫弟子の責任としてぜひお願いしたい。僕らがいろいろ気がついていることがあっても、もうそんなことをやっている寿命がなさそうですから、高瀬君を中心として、慶應の史学科の仕事としてぜひ本格的にやってほしいと思うのです。

そのほか、幸田先生は慶應に長くいましたから、たくさんの弟子を慶應でつくられて、その中にたとえば吉田小五郎さん、幸田先生のいろいろな側面のうち日欧通交史の側面のキリシタンのほうを受け継いで深めた人です。ただ、吉田さんは幼稚舎の先生のほうが好きで、大学の教師はいやだなんて言って、研究条件が悪かったから――幼稚舎（小学校）の教員をやって、それで研究するというのはとても困難です――だから、いろいろな仕事を十分にまとめて残されなかった。しかし、ばらばらな雑誌にちょこちょこ書かれただけで終わったり、あるいは原稿のままで残っているものもあるかもしれないし、そんなふうなものを含めて、それもぜひちゃんと吉田さんのお弟子さんたちの仕事としてやっていただきたいと思っています。

それから、高橋磌一君は私と吉田さんとの間、私より四年ぐらい前の卒業です。高橋君は卒業論文が幕末の貨幣流出の問題をやって、幸田先生について日欧通交史の側面、同時にまたそれは、日本経済史研究のほうにつながる仕事ですけれども、そういう面から『洋学論』などを書いた。『洋学論』という本は慶應を出て二、三年目

に頼まれて書くのですが、幸田先生のところへいったら、幸田先生が、そういうことをやるならこの本を読めと言って教えてくれたというのが、さっき出てきた藤田茂吉の『文明東漸史』、それから岩崎克己氏の『前野蘭化』、前野良沢のことを書いた本（これは素晴らしい本）です。その二冊の本を教えてくれたおかげで、わずか半年ぐらいで、あの有名な名著を、二十七、八になっていない、高橋磌一がまとめ上げてしまうのです。藤田茂吉の『文明東漸史』は、幸田さんが歴史のほうに入っていくもとになったと思われる本なのです。

『凡人の半生』という幸田先生の自伝の中に出てくるけれども、小学生時分に上野図書館にしょっちゅう通って、そして一生懸命本を読み始めた、そのときに一番夢中になったのが、矢野文雄の『経国美談』と藤田茂吉の『文明東漸史』であったと書いているのです。高橋君に教えるときはそんな話はしないで、ただ、この本が洋学史としては一番いい本だからこれを読め、読まなければだめと言って教えたと言うのです。そんなふうにして、福沢諭吉からの流れが全部つながって、高橋磌一のところに来ているわけです。不思議な、歴史の進歩の一つの流れの秘密を語っているような気がします。そのほか今宮新先生にしても、いっぱい慶應のなかにとにかく無数の弟子を、慶應だけじゃなく、外にもいっぱいつくった。さらに孫弟子をいっぱいつくって、日本の歴史学及び三田の史学に貢献していると思うのです。

何だかわけのわからない話をだらだらやって恐縮ですけれども、しゃべり過ぎたようですから、この辺で終わらせていただきたいと思います。

司会　どうもありがとうございました。幸田成友先生は、私の存じ上げている限りでは大変な蔵書家でもあります。また、河北先生から昔伺った話では、講義が大変お上手で、晩年まで実にお年を感じさせないような朗々たる声で教室で話をされて、お隣の部屋の先生が聞き惚れて、自分の授業をやめてしまったという話を伺ったことがございます。こういうようなお話は、後でまた時間があれば、林先生あたりからもお話を伺いたいと思っております。